



ノーベル医学生理学賞受賞に思う

- ◇ 前号のセレンディピティに引き続き、先日、話題となった今年のノーベル医学生理学賞受賞のニュースを見て思ったことをまとめてみます。
- ◇ 10月1日、「2018年のノーベル医学生理学賞を京都大高等研究院の本庶佑（ほんじょ・たすく）特別教授（76）が受賞」というニュースが飛び込んできました。本庶氏は免疫の働きにブレーキをかけるたんぱく質「PD-1」を発見し、このブレーキを取り除くことでがん細胞を攻撃する新しいタイプの「がん免疫療法」の開発に結びつけた功績が評価されたということです。
- ◇ 私が着目したのは、その後のニュースの中で、本庶氏が記者会見を開かれたときに話された言葉でした。

【以下、ウェブニュースから引用】

本庶氏は研究の原動力を聞かれると「何かを知りたいという好奇心だ」と即答する。研究する上で大切なことは「好奇心」「勇気」「挑戦」「確信」「集中」「継続」。それぞれの英語の頭文字から「6つのC」と表現する。それは自身の人生そのものだ。

「定説を覆す研究でなければ科学は進歩しない。学問の世界も保守的で、定説に沿わないような論文はなかなか認められず苦勞するものだが、後世に残る研究とはそういうものだ」と前置きした上で、科学者を目指す若い人には、こんな言葉を贈る。

「教科書に書いてあることが全部正しいと思ったら、それでおしまいだ。教科書は嘘だと思える人は見込みがある。丸暗記して、良い答案を書こうと思う人は学者には向かない。『こんなことが書いてあるけど、おかしい』という学生は見どころがある。疑って、自分の頭で納得できるかどうかが大切だ。大切なことは、人から教えてもらったものをそのまま信じるのではなく、自分の目で見ることが大事だ」

- ◇ 國學院大學の新富教授は、ある講演で、「人から教えてもらって得たものを“知る”と表現します。そして、自分自身で確かめて（体験を通して）得たものを“識る”と表現します。今こそ、学校教育では“知る”から“識る”への転換が必要なのです」と言われました。まさしく、この本庶氏が言われたことと同じことだと思ったわけです。
教科書で教えなければならないものが肥大化している今、すべてを“識る”に変えることは難しいかもしれませんが、教える立場にいる私たちが、そのような意識をもって子どもたちの教育に当たることが大切ではないでしょうか。
ノーベル賞受賞のニュースから、そんなことを思いました。